

---

## 編集後記

---

WASEDA RILAS JOURNAL No.7をお届けします。本号は一般投稿 25 本、部門特集 3 部門、開催報告 1 本および活動報告と、前号以前に引き続き充実した内容となりました。ご寄稿くださった皆様、査読にあられた諸先生方、編集の実務を担当された助教・助手の皆様、さらにはこれらの活動を支援くださった学術院事務所の関係各位に、まずは謝意を申し上げます。

一般投稿は、論文、研究ノート・翻訳、報告とその形式もさることながら、日本語へ邦訳、紹介されたものも含めて、多言語化が進行しつつある点に、ひとつの画期を認めることができるように思います。本誌の「掲載論文等に関する規定」では、論文の使用言語を「原則として日本語・英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・中国語・スペイン語・イタリア語・朝鮮語」としておまして、日英両言語に限定されない内容となっています。この規定を刊行へ結びつけるためには、投稿から査読、編集へいたる各段階のご尽力が不可欠となるわけですが、少しずつ内実をとまないつつあるように感じられます。他方で、多言語ばかりが多様性のすべてではありませんで、日本語で書かれた、もしくは日本語へ訳された論文等の多彩な内容は、あえて申し上げるまでもないでしょう。

総合人文科学研究センター（以下、「人文研」）は、2018 年度は 13 の研究部門で構成されていましたが、本年度より新たに「拡大するムスリム社会との共生」「心と身体の関係と可塑性に関する学際的研究」の 2 部門を加えて、合計 15 の研究部門を擁することとなり、研究活動の一層の活性化が期待される態勢となりました。同年度には、「角田柳作記念国際日本学研究所」が 5 年の活動期間を終了しましたが、さらなる継続のご申請があり、了承をされています。部門特集は、これらのうち「トランスナショナル社会と日本文化」「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」「現代社会における危機の解明と共生社会創出に向けた研究」の 3 部門から、2018 年度に開催されたイベントの報告をお寄せいただいています。いずれも充実した内容であり、今年度以降もひきつづき本誌を研究部門の成果発表の場としてご活用いただくことで、本誌の特色も際立つことになるのではないかと感じております。

開催報告は、国際シンポジウム「東アジア文化交流—呉越・高麗と平安文化—」に関するもので、これは人文研の主催による「年次フォーラム」として開催されました。2018 年度は、吉原浩人教授・河野貴美子教授を中心として、人文研研究部門「グローバル化社会における多元文化学構築」および中国・浙江工商大学東亜研究院、韓国・蔚山大学校人文大学日本語日本学科なども主催として名を連ねていただき、かつ多くの聴衆を得て、名実ともに充実した国際シンポジウムでした。ご寄稿くださいました河野貴美子教授には、とくに感謝申し上げたいと存じます。

人文学の存在意義が各所で問われる昨今です。私見では、人間の営みにより生み出された、多数、多様な情報を集積して、帰納していくことで、その時代、社会、集団、思想などのイメージの全体像を形成していくという点で、人文学の多くの領域は共通するのではないかと考えています。帰納という知的営みは、決して学術の世界だけで有効なものではなく、社会や文化を越えて活動する際にも機能するもので、人文学の今日的意義をその点に見出しうるとするならば、本号を含む WASEDA RILAS JOURNAL および人文研の諸活動が、それを体現するものでありつづけることを祈念して已みません。

（早稲田大学総合人文科学研究センター副所長 伊川健二）